



[本文監修:南九州歴史学会 画:KENRO]

明治維新150周年企画

かごしま ISHIN物語

明治維新がもたらしたさまざまな変化を分野ごとにご紹介します。

第5話 薩摩の文化と芸術

日本の国歌が生まれたきっかけは、薩摩藩による日本初の軍楽隊でした。今回は、新たなものから古のものまで、文化と芸術に関わった薩摩の人々をご紹介します。

登場人物



君が代の生みの親
大山巖
Iwao Oyama

薩英戦争の後に砲術を学び、大砲の改良などをおこないます。明治時代には陸軍の中核となり、日清・日露の戦いを指揮。元帥陸軍大将となりました。



日本初の博物館を設立
町田久成
Hisanari Machida

薩摩藩英国留学生やパリ万博に参加し、維新の際には主に外交の分野に携わります。博物館設立後に辞職し、出家。岡倉天心やフェノロサなど近代芸術の中核となる人物と交際しました。

維新紀行 楽器

全国的に流行した
薩摩琵琶

「君が代」の原点の1つともいえるべき薩摩琵琶は薩摩藩内で広まっていた楽器ですが、幕末には島津斉彬が他藩の大名を招いて演奏が行われたといわれています。

明治天皇も音色を愛したというこの楽器は、文明開化の後も維持、発展が続けられ、明治後期から大正時代にかけて全国的に流行しました。



今回は 薩摩と新しい政治体制

日本の吹奏楽と国歌の始まり

文明開化によって西洋の文物を積極的に取り入れるようになった明治日本。薩摩は他の地域と比べ少し早く取り入れていました。25代島津重豪が西洋のはく製技術を取得していたり、幕末の薩摩藩はイギリス人たちを洋風の飲食物でもてなしたりしています。

練習に必死に励みました。この中には、後に海軍軍楽長となる中村祐庸や陸軍軍楽長となる四元義豊などが含まれています。これが日本の吹奏楽のはじまりです。フェントンはさらに西洋諸国と同様、国家の重要な式典の際に歌われる歌を制定する必要があると指摘しました。政府は作曲をフェントンに依頼。作詞は大山巖（西郷隆盛従弟）が担当したといえます。この時、大山は薩摩琵琶の琵琶歌「蓬萊山」の一節から歌詞をとったといわれています。このようにして誕生したのが「君が代」です。

「君が代」は薩摩バンドが結成された翌年、彼らによってはじめて演奏されます。このことから、薩摩バンドが練習していた横浜の妙香寺には日本吹奏楽のはじまりと、君が代の誕生地を示す記念碑が建てられました。

このようにして「君が代」は誕生しましたが、イギリス人が作曲したため西洋風の楽曲となり、日本人にとって耳慣れないものでした。そこで後に、中村と四元は「君が代」の改訂を政府に提案。雅楽の人物の協力を得て現在の楽曲へと変化したのでした。

伝統文化を守る 日本初の博物館

文明開化が叫ばれる中、一方で伝統的な文化を大切にしない動きもみられました。政治変動の中で、美術品が海外に流出したり、工芸や文化が衰えそうになっていたりしたのです。これらの対策に乗り出したのが町田久成です。彼は石谷（鹿児島市）を治める一族

に生まれ、書や画、横笛などに造詣があった人物です。薩摩藩英国留学生の一員として海外に渡航、西洋諸国の博物館を視察します。明治維新の後、町田は外交に携わる役職に就きますが、その中でも国内外の博覧会の出展に尽力します。そこで歴史的な文化財の流出を懸念し、博物館の設立を目指しました。庶民が持つ古い美術品などは流出や紛失しないよう購入。我が国の歴史と文化を伝える品々を集めた帝国博物館の誕生につながったのです。

時代の激流の中、新しいものを進んで取り入れるだけでなく、旧来のものを次代に受け継がせようとした人々もまた薩摩から輩出されました。彼らの挑戦の積み重ねの結果、世界を魅了する文化大国になったのかもしれない。